国際教養学部 FD 委員　平岩恵里子

# 2023 年度　国際教養学部 FD 活動報告

国際教養学部では 2021 年度から始まった新カリキュラムと旧カリキュラムの並行も 3 年目となり、昨年度に続いて授業の円滑な実施を継続した。ディプロマポリシーに基づく学修成果を適切かつ多角的に把握・評価するだけでなく、今年度は学部教員側へ新しい知見をインプットすることを意識したＦＤ活動となった。

## １．環境規制とサステナブル認証がサプライチェーンを通じて与える影響

アジア経済研究所から講師を迎え、パーム油の規制と認証、貿易に関して生産国側と消費国側の政策がどのような効果を生むのか、についての研究を学んだ。環境を専門とする学部教員の研究とは別の視点からサステイナビリティを捉えた研究であるため、それぞれの教員が担当する授業において自身の研究とからめながら新しい知見を盛り込むことが出来る。

具体的には、パーム油持続可能性認証について焦点を当てた研究で、①消費国の民間部門が策定した持続可能性認証が途上国生産者に与える影響、また生産国の政府が策定した持続可能性認証がどのように普及するのか、②規制や認証と貿易との関係では、とりわけグローバルバリューチェーンの役割が重要である、という点を学んだ（2023 年 11 月 16 日/参加 11 名）

## ２．より良い授業を目指して―授業の工夫例を通じて学ぶ―

国際教養学部北村雅則教授による FD。目的は、①授業の改善、特にアクティブラーニングにつながる具体的な工夫について学ぶ、②教育活動について自分の講義を振り返り、同じような工夫ができないか模索する、ことであった。

北村教授ご自身が開発されている TEachOtherS という論文購読の支援ソフトを使ったゼミ活動を学部教員で共有した。講義やゼミにおける論文やテキスト輪読の時に起きる問題として、①学生によっては読まない、②読んでも読み込みが甘い、③読んでも意見やコメントを言えない・議論ができない、がある。新しいソフト TEachOtherS は、学生自身がブラウザ上で論文内容にマークアップしながら読むことができ（論点に賛成か反対か、より深く知りたいと思うかどうか、等を基準に）、それをグループで共有することができるものである。学生の評価として、自分が気づかない論点に気づくことができる・自分と違う意見を議論のテーマにすることができる・実際に意見を発話することで深く考えるようになった・他人の意見に興味を持つようになった、など肯定的なものが多かったことが報告された。

他方、学生は論文や資料を「批判的に」読むことが苦手であることが明らかになったことも報告された。この点は、学部教育の根本に関わる点でもあり、今後の問題意識として共有した。また、このソフトは開発途上とのことで、すべての教員が使える状況にはまだないこ

ともあり、論文の読み方の指導について各教員がさらに工夫が必要であることが共有できた。（2024 年 2 月 1 日/参加 18 名）

3. 卒業論文の実績と指導について―卒業論文の質向上を目指して

教授会後の FD 研修会として開催し、昨年度に引き続き卒業論文を共有することによって質の向上を目指す一助とした。演習担当教員が近隣の研究分野同士でグループを組み、それぞれの学生が取り組んだ研究内容の動向や執筆状況をグループ内で開示、卒業論文の成果を共有しながら意見交換を行った。その折には、演習の運営の仕方や卒業論文の指導の仕方だけでなく、苦労した点についても知見を共有した。テーマをどう設定させるか、先行研究にどう取り組ませるか、行き詰った時にどう乗り越えさせるか、等、質の向上も含めて次年度に向けての課題も明らかになった。（2024 年 3 月 1 日/参加 17 名）

以上